

松代小学校テーマ

「対話」「寄り添い」をとおした、主体的・協働的な学びの実現

1 期 日 令和6年11月6日(水)

2 場 所 長野市立松代小学校

3 共同研究者 岩川 直樹 (埼玉大学 教授)

4 日 程

(1) 受付 (音楽棟玄関) 13:00~13:15

(2) 開会式(多目的室) 13:20~13:30

①主催者挨拶 信濃教育会 研究調査部部长 和田 敦 様

②会場校挨拶 長野市立松代小学校長 勝野 学

(3) 研究発表(多目的室) 13:30~13:40

(4) 公開授業 13:45~14:30

单元名「松代っておもしろい」

6年2組 男子6名 女子13名 計19名 授業者 寺澤 澄人

(5) 授業実践の分かち合い①部(多目的室) 14:40~15:20

「6年2組の授業から」

(6) 授業実践の分かち合い②部(多目的室) 15:25~16:25

「岩川先生との座談会」

(7) 閉会式(体育館) 16:30~16:40

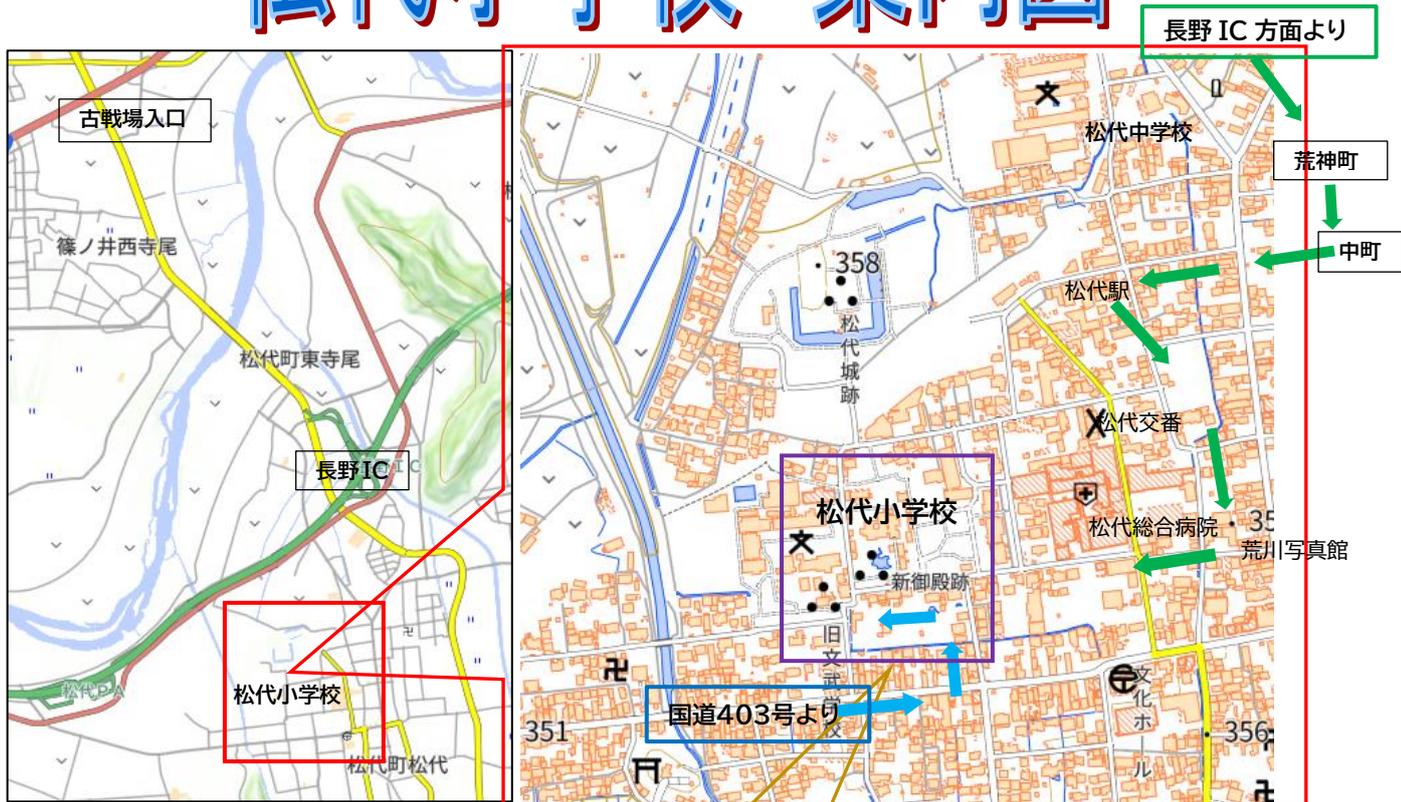
①会場校挨拶 長野市立松代小学校長 勝野 学

②諸連絡

5 その他

- ・松代小までのルートは別紙をご覧ください、正面玄関前の駐車場等をご利用ください。
松代小学校東側(旧真田邸西)の道路(赤線部分)は時間帯で交通規制があり通行できませんので、
ご注意ください。

松代小学校 案内図



長野IC方面からお越しの場合

- ➡ 中町交差点を右折
- ➡ 松代駅前を左折
- ➡ 松代交番、松代総合病院正面玄関前を通り、荒川写真館前を右折
- ➡ 文武学校前「鍵の手」を通り西門へ

国道403号を篠ノ井方面からお越しの場合

- ➡ 国道403号中道島信号を右折
- ➡ 紺屋町信号の手前を左折
- ➡ 文武学校前で左折
- ➡ 西門へ



松代小学校東側（真田邸西）の道路（の部分）は、
 平日 7:00～9:00、
 14:00～17:00 の時間帯で
 交通規制があり、通行できません。
 ご注意ください。

R6年度 松代小学校 わたしたちと子どものあゆみ

学校教育目標

- やさしく（相手を思いやり支え合える子ども）
- かしこく（学び方を身につけ、粘り強く追究する子ども）
- たくましく（自ら健やかな心と体を育む子ども）



重点目標

「対話」「寄り添い」をとおした、主体的・協働的な学びの実現

1 本校の児童の姿

- 何かを「やりたい」というエネルギーを感じる子どもたち。
- 活動に没頭できる子どもたち。
生き物探し、栽培活動などの屋外での活動
- 素直に教師や友達の話を聞くことができる。
- 元気がある、明るい、表現することが好き、やる気満々
- △やりたいことが見つけられない
- △問いを持ってないで困ってしまう
- △友達や教師とのつながり方がまだ不十分である。



2 教師の願い

願う姿

自分で多角的に考えて動けるようになってほしい。
さまざまな人とかかわりを持ってほしい、松代の良さを再確認してほしい
粘り強く活動に取り組んでほしい、
自分たちの学校をどうしていきたいか、行事のたびに考えたい。

3 研究テーマ

「自ら考え、「ひと」「もの」「こと」とつながりながら、学びを深める子ども
～探究的な学びの支援のあり方～」

(1) テーマ設定について

子どもたちはやりたいことを一人一人持っているが、やりたいこと＝学び、につながらないため、追究し続けることが難しく、「問い」からずれてしまうこともある。そこで、教師は「ひと」「もの」「こと」をつなげ、様々な活動に取り組み、自分たちの願いや問いをもって行ってほしいと考え、本研究テーマとした。

(2) 研究の方法

今年度は、年間 17 回「siro カフェ」（1 回 20 分）という時間を確保した。子どもたちとともに学びを深めていくために「対話・寄り添い」をするには、教師同士も「対話・寄り添い」合っていくことが必要ではないかと考えたからである。お茶を飲みながら、気軽に職員でテーマをもって子どもの姿や教師観などについて意見交換することにした。

Siro カフェの時間には、これまでに「子どもたち・学級のよさ」「松代小学校の考える問い」「学級の中核活動について考えていること・悩み」「ロング自学の時間の子どもたちの姿」「夏休み明けの子どもの姿」などをテーマとしてきた。そうして話し合う中で、「対話・寄り添い」を繰り返し行っていく中で「問い」が生まれてくるのだと考えられた。

成果として、20 分間という僅かな時間ではあるが、この中で教師ひとりの教師観や考え方を少しずつ知ることができてきた。お互いの考え方や思いを知ることで教師集団としての共通部分が徐々に出来上がって同じ方向を見ながら進むことができているように感じている。

また、研究の前に時間を確保しているので、研究に繋がる内容についてもそれぞれの意見を否定することなく、「こう考えている」「こうしたいと思う」という話をできるので職員間のズレが少なく、短時間で方向や課題を考えられるようになってきた。

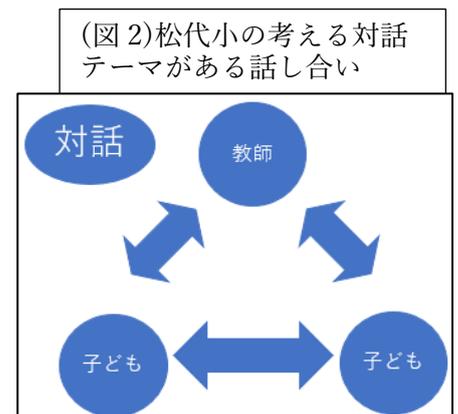
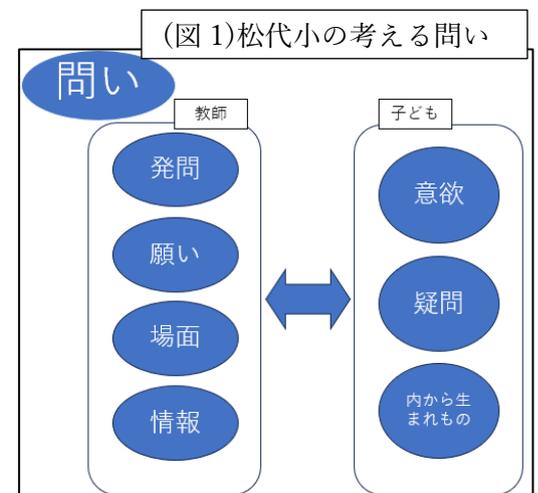
さらに siro カフェで、「問い」とは何か職員集団で考えてみたところ、「問い」とは教師にとっては「発問」であり、子どもにとっては「疑問」である、「自分の内から生まれてきているものが前提である。」「自分が納得して決めているもの」「子どもから自然に出てくるもの」、などさまざまな意見・考えがあることが見えてきた。（図 1）

また、松代小学校の考える「問い」だけでなく、「対話」や「寄り添い」についてもどのようなものになるのか定義を考えてきた。

(3) 研究の内容

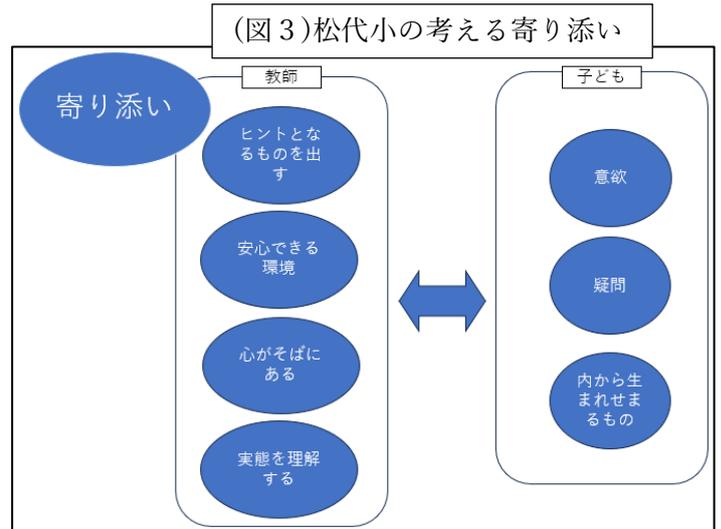
学級や子どもの実態をとらえながら、「対話」「寄り添い」「問い」をキーワードにして研究を進めて以下の四点を見出してきた。

- ①子どもたちが「ひと」「もの」「こと」とつながるのか考え、
追究していく様子を教師が肯定的にとらえて、理由をつけて説明することが「寄り添い」だと考えている。
- ②場面によって、「対話」も「寄り添い」も異なってくるが、教師と子ども、子どもと子ども、他者と子どもがどうやってつながっていくのかを見て、寄り添っていく授業づくりにしていきたい。



③「対話」とは、「ひと」「もの」「こと」などさまざまなものに関わる中で子ども同士、教師と子ども、地域の方などつながり、分かち合うために話をしていく。活動していくときに、必ず対話があると考えた。(図2)

④「寄り添い」とは、「問い」をもとにして活動する中でお互いに「対話」していくために子どもの実態を把握しながら、子どもたちが学習に進んでいくための支援だと考えた。(図3)



1学期に研究を進めていく中で、だんだんと松代小学校の目指す子どもの姿や授業の在り方が具体化されてきた。松代小学校の「問い」について考えてきた。子どもたちから生まれる「問い」を教師が見つけ、それを学習につなげて広げていくためには、本校のテーマである「対話」と「寄り添い」がキーワードになって

いくのではないかと考えた。子どもたちが、どのように「ひと」「もの」「こと」とつながり、どのような「問い」が生まれるのかその過程を追っていき、主体的で協働的な学びの実現について考えたいと考えている。

⑤ 7月 埼玉大学岩川先生との研究会でご指導いただいたこと
【岩川先生の言葉】

伝えたい思いや言葉が何か、どんなふれあいや分かち合いができるか。分かち合うとは何でしょうか。表面から深いところまでお互いに心を寄せて、触れ合って同時に分かち合うこと。同じものを同じ時に見て感じて触れ合うことが、一緒に何かできるようになり、そこにいる子どもや教師が分かりあう以上によさを分かち合って感じていくことで変わっていくと思う。まず、こどもにもう30cm関心を向けるところから始めたい。

岩川先生の言葉を受けて、「ひと」「もの」「こと」と触れ合う中で感じたことを共有して広げていくことが子どもたちにとって探究的に学び続けるための支援にもなっているのだと考えた。

4これまでの実践の様子

(各学級で「問い」が生まれるまで、どのような「対話」や「寄り添い」があったのか)

(1)令和5年度2年1組(現在3学年)

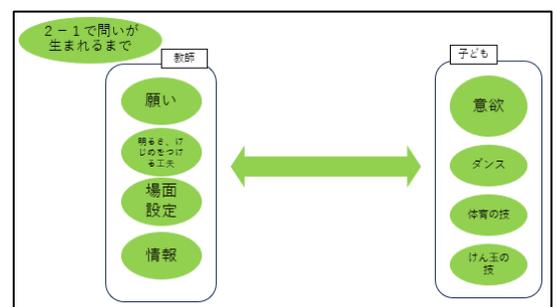
① 学級・学年の児童の様子・特徴

長所：元気がある、明るい、表現することが好き、やる気満々

○元気のある子がたくさんいるというよさは、反面自己主張が強く、ゆずれないことが多い場面がでてくるので、元気がありつつ譲り合う場面がでてくるように環境を整える。

○明るいよさを生かしつつ、けじめをつけるような工夫が必要。約束事を子どもたちと決めた。

○音読や音読劇のセリフを一人でやりたい子、ナレーターをやりたい子、歌やダンスが得意な子、体育の得意な技を見てもらいたい子、けん玉や自分の作ったキャラクターを見てほしい子など、多くの表現する場所を求めている子どもたちが多かった。





友とたんぽぽと対話、寄り添い

わたげとの対話、寄り添い

自分自身との対話、友との対話、寄り添い、



自分に必要な道具を考えて準備

ビニール手袋をすれば触れる

川に入るのが苦手な子が堂々と歩く



神田川と子どもたちの関りは、自然に親しむよさや、難しさを学ぶきっかけになった。

②2年生になって、国語の授業で「スイミー」に出会い、「問い」が生まれるまで

・音読が進むにつれて、「赤い魚たちを描きたいね」という子の発言で、ひとりずつ描きだし、「海の様子も飾りつけよう」と折り紙で作って魚の周りに貼ったり、描いたりした。「大きな魚も描きたい」「海の中のものを分担して描こう」「読みたいところも分担しよう」「図書館に同じ絵本があったよ、借りてくるね」ということで、国語から図工、生活の時間で学習を広げていった。1年生の時の「大きなかぶ」の学習の反省を生かして、ここでは教師から「スイミーの歌もあるよ」と提案をした。セリフを言いたい子、主役をやりたい子、その様子を見て自分はどうするか考える子、言いたいけれど自信がない子、子どもたちの思いや願いが学習の場面、場面ではっきりしてきた。

言いたいけれど自信のない子には、一言で言える短いセリフを分担し、さらにその順番に並んでわかりやすく言えるようにした。主役スイミーは4人にしたり、長い言葉や感情豊かな言葉は、希望したメンバーでどうやって分担するかを考えて、練習をしたりした。話し合いが進まなそうなメンバーのところは、事前に把握しているので、様子を見て、担任が声かけをした。(手立て)



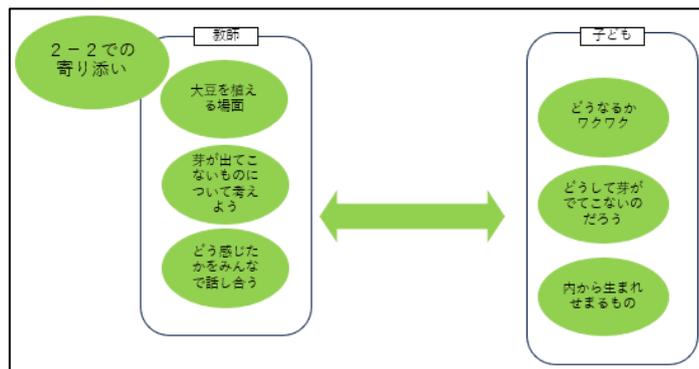
発表会を開くことにした子どもたちは、自主的にポスターを作り出し、誰に見てもらいたいかを考え、班ごとに招待状を作成、配布。全校の友だちにも呼びかけようということになり、お昼の放送の体験をし

た。身近なところからの招待が始まり、隣のクラス、1年生、そして、全校という順番で行った。最初は、音楽室や多目的室だったのだが、最後は体育館で行うことになっていたので、リハーサルをした。子どもたちは、その言葉でやる気満々になり、今までとは大違いの発声で練習をし、本番は大成功。子どもたちは、大満足。達成感を味わうことになった。

(2) 令和6年度2年2組

①学級・学年の児童の様子・特徴

明るく、人懐こい子どもたちが多い。生き物探しや畑の栽培活動など、屋外での活動に特に意欲的に取り組んでいる。子どもたちが、自分や友だちのよさを認め合いながら、力を合わせて、自分たちのやってみたいことを実現できる力を育んでいきたい。そのために「よく聞く」「よく考える」ことを心がけながら、生活している。



②子どもの中に生まれてきた興味・関心（教科や時期、学習の場面など）

継続して大事に生き物を飼育する姿や生き物の状況に応じて、どこで飼育するのがよいかを考えて行動する姿など、捕まえることをただ楽しんでいただけの様子から、生き物の命を大事にすることにも意識が向いてきた。また本年度は年間を通して大豆の栽培に挑戦し、継続的に手をかけ栽培し収穫の喜びを味わったり、自分たちの手で加工していただいたりする学習をしている。子どもたちは、大豆を育てて、「豆腐を作りたい」、「きなこにして食べたい」、「味噌にして畑のキュウリにつけて食べたい」など願いをもっている。

③どのような「対話」「寄り添い」を行う中で、「問い」が生まれてきたか、「人」「もの」「こと」とつながっていったか。



大豆の種まきの場面では、種の大きさや形、色やにおい、触った感じなど、じっくり観察してから黒ポットに種をまいた。自分の種に名前をつけて大事に種まきをした子どももいた。「これからこの種がどんなふうになっていくんだろう。ワクワクします。」そのような種まきから1週間が経ち、数人の子どものまいた種が芽を出した。モコっと土を盛り上げて、種の時より大きく膨らんで、成長していることが分かり、「やったー！芽が出た！」芽が出てきた友だちは大喜びし、し、「早く出てこないかな…」と自分の種の発芽を楽しみに待つ子たちは、待ち遠しい気持ちで黒ポットをのぞいた。同じ日に種をまいても成長のスピードは違い、子どもたちは毎日観察を続けています。大豆の種まきから3週間経っても、まだ発芽しない種が半分ほどあった。極力水をあげていなかったため、栽培の方法の見直しを行った。子どもたちは、早速お家の方に聞いてきた子が数人いて、Mさんは、「芽が出ない原因は、土に入った虫が豆を食べてしまっていること、直射日光に当てず、水はもう少しあげた方がよいこと」を家で調べてきた。

そこで、もう一度新たに黒ポットに種まきを行い、今度は、一つの穴に2～3粒種を入れて、時間帯によって黒ポットを置く場所を変え、水は前回よりも少し多めにあげることにしました。すると、1週間ほどでほとんどの種が発芽し、元気に育ちはじめた。今は様々な情報が手に入りやすいが、その中で、情報を選ぶことが必要になり、書いてある通りにやってもうまくいかないことも経験した。自分たちに合ったやり方を見つけることは難しいが、おもしろいと感じた子どもも多かった。

夏休み明け、大豆畑に出かける前に、子どもたちとどのように成長しているのか予想し、「大きくなっているかな」「かめむしに食べられちゃっていないかな」「雨で倒れていないかな」など、ドキドキワクワクしながらいざ畑へ向かった。畑へ着くと、「わあー！！」と、歓声が上がりました。「すごい、伸びてる！」「葉っぱがでっかくなってる！」「花も咲いてる！」「まめができてる！」子どもたちの胸の辺りまで大豆は青々と立派に葉を茂らせ大きくなっていた。大豆と一緒に、畑の草もかなり大きくなっていたので、この日はみんなで草とりをした。蒸し暑い天気だったが、みんなで一生懸命草とりをしたので、30分ほどで畑がすっきりした。みんなで力を合わせると時間も早く、とてもきれいにすることができたことを実感していた。

④支援・手立て等

畑は少し学校から離れていたが、できるだけ大豆の様子を観察できるようにたくさん足を運ぶようにした。子どもたちが見つけた大豆の変化や成長をカメラに記録して教室に掲示したり、観察カードに書いたりして、大豆の成長の過程や自分たちの取り組んできたことが見えるようにした。Kさんは、夏休み明けの観察カードに「あんなに小さかった大豆の種が、こんなに成長していてびっくりしました」と書いていた。また、Oさんは、「かめむしが、いっぱいいたから討伐する」と言って、手でやさしく捕まえて、大豆畑から離れた草むらに放していた。それも30匹ほども。

子どもたちの気づきや行動をよく見て、クラス全体に広めたり、投げかけたりしながら、みんなで力を合わせて大豆を作っていこうという意識を年間を通じて大事にしてきた。教師自身も一緒に大豆づくりを楽しみ、分からないことにぶつかったら子どもたちと一緒に考え、子どもたちをよく観て対話を大切にし、子どもの思いや言葉を大事にする必要性を感じた。

(3) 令和6年度2年1組

①学級・学年の児童の様子・特徴

自分の意見を伝えようとする児童が多く、様々な意見が出される。

「教えてあげる」「教えてほしい」を声に出して伝えることができ、友だち同士のやり取りも上になってきている。

考えがなかなか思いつかない子や、あっても言い出せずにいる子が、ペアやグループなどでやり取りする中で少しでも自分を表現でき、より多くの意見・考えを認め合える集団に成長していった。

②子どもの中に生まれてきた興味・関心

国語「かんさつ名人になろう」で、様々なもの（野菜や生き物、植物）を観察する中で、葉をこすったり竹をたたいたりすることで生まれる音に興味を持つ児童がいた。そこで音楽の授業で、身の回りにあるものを使った音作りの活動を行うことにした。

音当てクイズから始め、一つのものからいろいろな音が聞こえることに気付いた子どもたちは、ビニール袋、石、缶、瓶、ボウルなど様々なものからどんな新しい音が作り出せるか、試行錯誤しながら活動をした。

③どのような「対話」「寄り添い」を行う中で、「問い」が生まれてきたか、
「人」「もの」「こと」とつながっていったか。

音作りをしていく中で、友だちと一緒に、一人で黙々と音を聞いて考えている子どもの姿があった。周りにいる友達に作っている音を聞いてもらうことで、「〇〇みたいな音がするよ」と教えてもらったり、それぞれが生み出した音（e.g. 雨と傘が開く音）を組み合わせて、「一緒にやってみよう」と挑戦したりする姿が見られるようになった。

一人で活動をしていたＹさんに「作れた音ある？」と聞いてみると、ビニール袋から機関車の音ができたことを教えてくれた。上下に振り、そのスピードを変えることで、動き始めてから最後停車するまでの様子を表現していた。クラスの間にも聞いてもらったことで自信をつけ、次時の石を使った活動では、たたいたり、大きさの違う石をこすり合わせることで、踏切の音や機関車のブレーキの音が生み出せないかと試奏を繰り返していた。

④支援・手立て等

一人、ペア、グループなどと限定せず、必要だと感じたら友達と一緒に活動できるような自由な枠の中で活動をした。困っている様子があれば、周囲にいる子どもたちに聞いてもらうように声をかけたり、始めに音を出す方法を全体で考えることで、活動の幅が広がるように心掛けた。

生み出せた音とその音を出す方法を記録することによって、一人の子が生み出した音を、みんなで再現することができた。

（４）令和6年度5年2組

①総合的な学習の時間での様子

総合で松代について調べる→良さを発信したい→松代に来る人を楽しませたい→松代マンになりたい→松代小についてあまり知らない→松代小を知り、みんなを楽しませたい→百不思議ブックを作ろう・松代小のみんなに企画をしよう

②班の様子

「松代小の不思議な場所ってどこがあるかな」→「赤いポストは何であるんだろう」「投函できるのかな」

（ア）生たちに聞きに行くがわからない

（イ）インターネットで調べるとあの形は昔のポストであることを知る。

（ウ）郵便局に電話してきくために、教頭先生に許可を取り、質問内容を班で考える。

（エ）絵便局に電話をして聞くが明確な回答は得られない。

→「わからないものもあるのか」「調べてもわからないってどうしたらいいんだ」

「ポストに製造会社は書いてあった。電話して質問してみたいな」

それを聞いた他の班「教育委員会に聞きたいことがある」「〇〇年度卒業生寄贈っていうのがあるから〇〇年度の卒業生にも聞いてみたい」

→郵便局の方もわからないことを知った子どもたちは、「自分たちだけじゃなくて「松代小の不思議募集～松代マンが調べます～」みたいにしたらたくさん集まっておもしろそう」と考える→これから不思議を募集する活動に

→関わりから問いが連鎖し合い、新たな問いへ

当日の授業の概略

- (1) 単元名「松代っておもしろい」
- (2) これまでの活動と授業の内容

【これまでの活動】

6年2組の子どもたちは、国語の「聞いて考えよう」の単元の中で松代に来ている観光客に松代のよさやどうして松代に来たのかなど、インタビューをした。その後、総合の時間には学校周辺の観光場所に行き、さらにインタビュー活動を行った。インタビュー活動を通して、子どもたちは、色んな人にもっと松代について知ってもらいたい、もっと松代の良さを広めたいと願いを持つようになった。そしてその願いを実現するために、パンフレットを作って観光場所に置いてもらう計画を立てた。

パンフレットは温泉やグルメなど子どもたちが興味があった6つのチームに分かれて作成を始めた。子どもたちはインターネットで調べGoogleスライドにまとめていった。ある程度まとまったところで地域の方にパンフレットを見ていただいた。すると「よくまとめているがインターネットを見ればわかることだけでいいのかな」と意見をもらった。子どもたちは、パンフレットの方向性について話し合い「自分たちだから作れるパンフレット」をテーマに決めて、改めてパンフレットづくりを行うことになった。

地域の方の協力もあり、学校近くの温泉にクラス全員で行き、温泉に入らせていただいたり、お店の方にインタビューをしたりして取材をした。子どもたちは「温泉のお湯がしょっぱい理由もわかったし、肌触りとか匂いとかも知れた」「お店の人に地域に伝わる昔話を聞くことができた」など、行ったからこそ感じられたことがたくさんあり、それをまとめることができた。そしてチームごとに行きたい場所を決めて取材をしたり、テーマに沿ってまとめたりしながらパンフレット作りを行っている。

【本時の内容】

本時はチームで作ったパンフレットをお互いに見合い、意見を伝え合う活動を行う。また、全員で決めた“自分たちだから作れるパンフレット”をキーワードにして見合うようにする。そしてお互いに作ったパンフレットを認め合い、意見を伝え合う中で“自分たちだから作れるパンフレット”に向けて、改善点を見出し、パンフレット作りの仕上げにつなげていく。